

大阪大学図書館報

Vol.28 No.4 March, 1995 (平成7年) 通巻117号

目次

- シアトル滞在記
- 阪神・淡路大震災
- プロバンス
- ナンテール図書館
- お知らせ
- 教官著作寄贈図書
- 会議・日程

シアトル滞在記

山崎隆史

昨年3月から9月にかけて、文部省の在外研究員に指名されるという思いがけない機会をいただき、アメリカ・カナダ・イギリス各地の大学図書館等を訪問してきた。研究目的とはいえ、知識・技術・語学の不足から、最新情報の宝庫にしながらごく皮相的な観察しかできなかったのではないかと、反省を始めればきりのない半年間であったが、いくらか見聞を広めることだけはできたのではないかと思う。今回はその訪問先の中から、在外研究期間の大半をすごしたワシントン大学、およびシアトルという街について少し書いてみることにする。

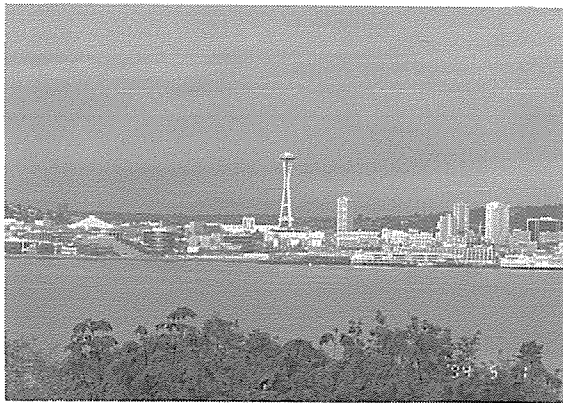
筆者が3月末から7月下旬まで4か月の間滞在していたワシントン大学は、アメリカ北西部最大の都市シアトルの郊外に広大なキャンパスを持つ、全米でも有数の大規模大学である。このキャンパスは広いばかりでなく、「アメリカで一番美しい」という誇らしげな言葉も、滞

在中に何人かの人から聞いた。ここに到着した3月末の、満開の桜に囲まれた中庭などを見れば、それも自慢とは思えなくなってくる、そういう環境であった。

この公園のようなキャンパスの中に、20以上のLibraryが散らばっている。アメリカの大規模大学では各学部や専攻ごとに別個の図書館・室を持つ分散型の図書館が主流であるが、ワシントン大学もその例にもれない。大学図書館はLibrariesと複数で表されるのが普通である。その主な施設としては、まず中央館の役割を果たしているSuzzallo and Allen Libraryが、文字どおりキャンパスの中央部に位置している。人文・社会科学分野の研究図書館であるSuzzallo Libraryと、自然科学分野中心の新館、Allen Libraryが結合した、総床面積約5万m²という宏壮で豪華な建物である。このSuzzallo and Allen Libraryと広場をはさんで反対側には、学部学生用の学習図書館である

Odegaard Undergraduate Library がある。ほかに独立した建物としては Engineering library、Chemical Library があり、筆者の受入先であった東アジア図書館 (East Asia Library 以下 EAL と略) など数多くの分野別図書館は、他の施設の中に同居している。

EAL は Suzzalo Library に隣接する Gowen Hall 内に位置しており、その名が示すように中国・日本・韓国・朝鮮の図書を中心として扱う図書館である。筆者のワシントン大学での生活はこの EAL の閲覧室や書庫で、一般の研究者や学生に混じって資料を読むところから始まった。その後、事務室の一角に個室を借りることができ、環境は飛躍的に改善されたが、



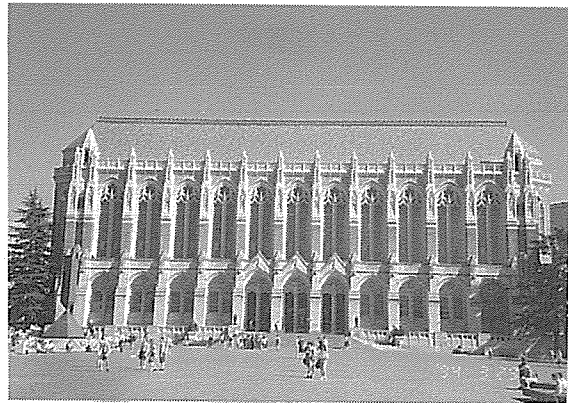
シアトル市

その頃になると、筆者の興味は完全にネットワークの方面に移っており、図書館としての EAL を利用する機会がむしろ減っていったのは皮肉だった。

「ネットワークの方面」というのは、無論インターネットを中心とする広域ネットワークのことである。わずか1年前のことではあるが、その当時日本では「インターネット」はまだ専門用語とっていい状況だった。当然ながら筆者も、インターネットのことなどほとんど何も知らずに渡米し、ネットワークによるサービスの最先端ともいべきワシントン大学のシステムに触れることになった。その後アメリカやイギリスでいくつかの図書館を見たが、ネットワークを通じた情報サービスという点でワシントン大学に勝るシステムには出会わなかった。ワシントン大学に長期滞在できたことは、結果的に

は最善の選択であったと思う。

ワシントン大学の図書館システムである、「WILLOW」と「WILCO」のことについて、ここでは詳しく説明するスペースはない。両方も基本的に提供する情報は同じで、ただ WILLOW は図書館の専用端末でのみ動くマウス操作主体のシステム、WILCO は通信回線を通じてパソコンからでも利用可能なキーボード操作のシステムという、操作環境の違いがある。操作性や画面の見やすさは WILLOW が優れているが、WILCO は自分用のパソコンとモデム、それにワシントン大学の C&C (Computing & communication: 日本の大学の計算機センターと情報処理教育センターを兼ねたよう



大学図書館

な組織) からもらえる利用者 ID があれば、いつでも、どこからでも電話回線を通じて利用ができる。

ワシントン大学到着後ほどなく、EAL の紹介でこの ID をもらい、自分のノートパソコンとモデムを使って自由に大学のホストにアクセスできるようになった。もちろん使用料はかからないし、電話料も、市内料金は固定制だから心配する必要はない。モデムが遅いことを除けば、理想的なネットワーク環境であった。ノートパソコンとモデムは、これから先海外に長期渡航する人には必須の道具であろう。

外部からワシントン大学にアクセスした場合、まず UWIN (University of Washington Information Navigator) というシステムにログインすることになる。WILCO は UWIN の一部として機能しているのだが、この組み合わ

せは強力で、目録情報はもちろんのこと、図書館利用案内の参照、雑誌記事の検索、百科事典や辞書などレファレンスの利用、最新ニュースの閲覧など、図書館機能のかなりの部分が外部から利用できるのだった。さらに、世界中のGopherや、当時はまだ利用され始めたばかりだったWWWサーバへのゲートウェイも設けられており、小さなノートパソコンから入手できる情報量は無限に近かった。

ネットワークを通じて、時間にも場所にもかかわりなく、これほどの豊富で多様な情報が(それもタダで)入手できるとは夢にも思っていなかった。これはほとんどカルチャーショックに近いインパクトをもたらし、アメリカに渡ってから1月くらいの中に、ネットワーク以外のことはほとんど考えられないほどになってしまった。

その当時、といっても1年にも満たない過去であるが、アメリカと日本の間にはネットワークに関して10年の差があるといわれていた。確かに、その頃インターネットからのぞくことのできる日本の情報はあまりに少なく、全国で30あまりのGopherサーバが存在するだけであった。1年もたたない内に、日本中に雨後の筍のようにWWWサーバが林立し始めるとはその時は予想もできなかった。今では筆者の職場に置いてあるパソコンでMosaicが動く。アメリカで集めてきたインターネット関係の情報の多くが、日本で容易に手に入るようになっている。先端技術の恐ろしさである。ただ、ネットワークからサービスされる情報の蓄積量を考えると、アメリカはやはり、かなり先に進んでいるはずである。

こうして、シアトルでの滞在のほとんどは、昼も夜もネットワークにあけくれながら、ノートパソコンやデータのつまったフロッピーを手にしてアパートと大学の間の徒歩10分の道のりを往復することですぎてしまった。シアトル周辺にはレーニア山やオリンピック山脈、ピュージェット湾など観光名所が多いが、そのほとんどをついに見ることなく終わったのは、もったいないことをしたとの思いも残っている。

そのかわり、シアトルのダウンタウンには週に1、2回は通っていた。アパートのある大学地区からダウンタウンまでは、バスで20分もかからない。(このバスは、郊外では普通のディーゼルエンジンで動くが、ダウンタウンに入ると地下にもぐって電気自動車に変わる、ユニークな乗り物である。)ダウンタウンには、庶民的な市場であるパイク・プレース・マーケットや古い商業地区パイオニア・スクエア、アジア系の店が並ぶインターナショナル・ディストリクトなど、特色ある商店街が随所にある。シアトル人は読書好きでもしられ、書店、古書店も多い。アメリカの大都市の中では安全などところと言われているシアトルでは、ぶらぶらと歩いていても不安を感じるようなこともなく、街歩きはいいレクリエーションとなった。

シアトルは雨が多い土地として有名などころであるが、筆者の滞在中、雨の日は1週間に一回ほどしかなかった。ある程度の街なら、その地を代表する動物もしくは植物というものが必ずといっていいほどあるが、雨の町シアトルの場合、それはナメクジであるらしい。現にナメクジ型のマグネットや置物などがおみやげとして売られている。とはいえ、ワシントン大学のシンボル、ハスキー犬の関連商品の方がはるかに多かったが…。

4か月はたちまちの内にすぎ、その間ハスキーを見かけることはあったが、異例の好天続きのせいで、残念ながら名物のナメクジを見ることはできないまま、シアトルを去ることになった。4か月という期間は、滞在するというより、居住するという感覚に近い。自分が住んでいる場所の名所はかえってなかなか訪れないものだが、シアトルでさしたる観光もせずに終わったのは、やはりあの街に住んでいたということかもしれないと、今にして思う。

この貴重な体験の機会を与えていただいた関係の方々、そして何の役にも立たない筆者を4か月も置いてくれたワシントン大学EALの方々には心から感謝している。

(洋書目録情報掛長 やまさき たかし)

阪神・淡路大震災

1. はじめに

平成7年1月17日(月)午前5時46分、淡路島、神戸市、西宮市、宝塚市を中心に阪神地区を大震災が襲った。気象庁は計測震度計のとおり、当初は洲本と神戸を震度6と発表したが、その後の実地調査で震度7の地域を改めて発表している。

大阪は震度計の設置された場所の数値が4であり、この数値が公式の値となっているが、例えば豊中市など体感からいってもそれ以上の震度であったと思われる場所が多い。実際の被害もそのことを裏付けているように見える。

大阪大学は教職員の被災(教官1名、学生2名の死亡を含む)、施設の被災(公務員宿舎の倒壊等約11億円)、物品の被災(約10億円)等多大の被害を被ったのであるが、附属図書館も豊中、吹田両地区にまたがって本館、両分館、部局図書室それぞれに書架(集密書架を含む)の倒壊・変形や図書の落下・散乱の被害が生じた。また、本館では新旧ジョイント部分の壁の亀裂、給排水管の破損、ガラスの破損等の施設の被害も生じた。

なお、附属図書館以外の各部局の学科図書室等のほとんどが何らかの被害を受けた。

2. 初期対応

本館では午前6時30分頃豊中キャンパス近辺に住居のある職員が点検に駆けつけた。まだ夜明け前で、停電のため暗く被害状況はわかりにくかったが、参考図書室や閲覧室の書架の倒壊や図書の落下・散乱、ガラスの破損等予想外の被害が確認できた。庶務部、施設部に状況を報告するとともに、職員には緊急電話連絡網による連絡に努めた。被害の大きい地域に居住する職員には電話が通じず、通じても自身の被害への対応に追われている職員もあった。分館、部局図書室等においても出勤できた少数の職員によって対応が始まった。

3. 職員の安否の確認

人事課からの指示もあり職員の安否の確認を急いだ。電話の不通、交通機関の寸断・渋滞で連絡不能の職員や出勤不能の職員もあり、全員の無事が確認できたのは19日遅くになった。

4. 被害状況と復旧

本館、分館、部局図書室それぞれで、被害状況の確認を急いだ。被害は大小とりまぜ多岐にわたったが、附属図書館所管の範囲で予算要求を伴う被災事項として19日までにまとめられた国有財産異常報告書や亡失・損傷物品の報告書で報告したものは表1、表2のとおりである。

表1 国有財産異常報告書に記載した事項

施設(本館のみ)	窓ガラス178枚(113m ²)が割れた。 旧館、新館及び書庫棟のジョイント部の床、壁、天井、柱が破損。 学生食堂側食品倉庫の水道管が破損し、水漏れ。 機械室消火水槽「逃がし水管」が破損、水漏れ。 屋上非常出口壁面及び扉の破損。 屋外階段室及び周辺部の沈下及び同室下壁の破損。 各館壁のひび割れ。 新館屋上の柱のひび割れ。
----------	--

表2 亡失・損傷したとして報告した物品

物品(本館)	亡失:片面書架6台(基) 文書庫3台 戸棚, 保管庫各2台 衝立1台 テレビ装置1台 図書16冊
(生命科学分館)	損傷:両面書架64台 両面電動集密書架99台
(吹田分館)	亡失:スライド・プロジェクター1台
(理学部図書室)	亡失:図書2冊

表に記載された損害のほか、附属図書館として災害復旧の予算要求をしないもの(転倒した書架の立て直し・歪みの補正や、落下・散乱した図書の再配架等の役務関係等)や部局から予算要求される部局図書室の被害は広範・多岐にわたり復旧作業に追われた。

1) 本館

本館では2階開架図書室書架が位置ずれを起こして傾き、1階参考図書室の木製書架の位置がずれ、2階参考図書室の書架のほとんどが倒れた。この結果、図書が多数散乱した。

書庫内の書架は無傷であったが図書の散乱状況は同様であった。旧館では2階参考図書室を中心に表1のとおり多量のガラスが割れた。

情報サービス課各掛事務室では戸棚や保管庫等が倒れ、ガラスの破片が散乱し、地階事務室は一部書架が倒れ図書が散乱したが、OA機器や目録用端末の被害はなく、生命科学分館に設置してあるホスト電算機も異常はなかった。

散乱した図書や雑誌の整理・再配架、ガラスの破片の掃除、2階開架図書室の傾いた書架の応急補強等が主な復旧作業となった。

17日:閉館。事務室の整理。閲覧室の復旧(書架を起こし、図書の再配架)。

18日:同上。男子職員は理学部、基礎工学部図書室の復旧。

19日:閲覧室、書庫内の散乱した図書の再配架。

20日:各室の最終点検と、破損したガラス等の清掃。

21日:新館2階閲覧室を除き開館する。

23日:新館2階閲覧室書架を応急補強。(ロープでつなぎ止める)

24日:新館2階の利用禁止を解除し、全面開館。

2) 生命科学分館

表2で報告されたように、スチール書架、電動集密書架163台に歪みが生じ、修理が必要となった。多数の図書や未製本雑誌が散乱した。

書架修理は必要経費を予算要求するが、緊急の危険はないため7年度の修理とした。

17日:閲覧室等の片づけ。

18日:開館。業務を再開。一部職員は本館及び吹田分館の復旧作業の応援。

3) 吹田分館

1階参考図書室の書架5台が将棋倒しとなる。書庫3層の書架が一部傾き、補修が必要となった。多数の図書が散乱した。

17日:閉館。閲覧室、書庫の図書・雑誌の再配架。

18日:午後から開館。書庫3層は入室禁止。生命科学分館から応援を得て再配架。

19日:開館しながら閲覧室、書庫の片づけ。

23日:書庫3層の傾いた書架をロープで固定し、利用禁止を解除。全面開館。

4) 理学部図書室

閲覧室の木製未製本雑誌架が全部倒れ、一部は損傷した。閲覧室複式4連書架が倒壊寸前となる。カウンター回りのアコーディオン・カーテンが損傷し、固定していた天井板が破損した。危険な書架を撤去し、倒れた未製本雑誌架を起こして再配架した。アコーディオン・カーテン等の修理は学部の予算要求により実施することとなる。

17日：交通機関不通のため全員出勤できず。閉室。

18日：危険な書架の撤去。図書は床に平積み。(本館から応援。研究室からも教官、学生の支援多数あり。)

19日：午前中書庫内の落下図書再配架。午後から開室。

5) 基礎工学部図書室

第1書庫複式7連9段の書架18列全部が入室も危険なほど倒壊した。第2書庫の一部書架も倒れ傾いた。抄録室も書架全3列が入口を塞ぐように倒れかかり、危険で入室が困難となった。いずれも書架を壁に固定したアンカーの多くが外れる。

閲覧室も参考書棚が倒れる。多数の図書が散乱。第1書庫は危険な状態であるため職員による復旧は見合わせ、予算要求して書架を新設し、それとあわせて運搬、再配架の復旧作業を外注することとなった。書架の予算要求は学部で行い、作業外注は図書館で行うこととなった。

17日：閉室。事務室の片付け。

18日：本館及び基礎工学部から応援。閲覧室の復旧、抄録室の復旧作業。

19日：第2書庫の片づけ

20日：同上

23日：開室。但し当分の間書庫の入室は禁止。

6) 人間科学部図書室

電動集密書架が故障し、書庫内書架が5~10センチずれ、未製本雑誌架が転倒した。図書は約2,000冊が散乱した。

電動集密書架は業者に点検を依頼した。ずれた書架はそのままとする。17、18両日を閉室し、職員で片づける。

7) 薬学部図書室

書庫内で複式4連5台が倒れ、単式書架2台が傾く。落下した図書、雑誌約500冊。傾いた書架は2月3日から6日にかけて閉室し、その間に業者による復旧を行う。

8) 微生物病研究所図書室

書架5連1台、4連2台が倒れた。落下した図書は約2,200冊。研究所の事務部職員や研究室職員、院生の応援があった。図書室への暖房の配管が壊れ電気ストーブ、ガスストーブで暖をとる。閉室はしないですんだ。

9) 産業科学研究所図書室

書架複式2連30台他、ほとんどの書架が倒壊した。図書は約22,000冊が落下。復旧には書架の更新が必要であるため、部局で予算を要求することとなった。それまで応急の復旧作業をおこなった。作業は研究所内の多数の教職員、学生の応援によった。

なお、危険箇所は立ち入り禁止措置とし、17日、18日は閉室。その後部分開室を経て2月1日より本格的に開室。

10) 蛋白質研究所図書室

壁側書架転倒2連。図書の落下が約1,000冊。手動式集密書架の床面に傾斜が生じ、書架がひ

とりでに動くようになった。1月17日のみ閉室した。

11) その他学科図書室等

理学部数学科図書室、言語文化部アメリカ研究文庫等多くの学科図書室が同様の被害を受けた。多くは書架を壁に固定するアンカーが引きちぎれ、傾いたり、倒壊したりしたものである。

表3 書架等からの落下・散乱状況

	本館	生命科学分館	吹田分館	理学部図書室	基礎工学部 図書室
図書	65,900	3,000	9,700	3,000	40,000
未製本雑誌	1,000	4,300	1,000	1,500	1,000

5. 対外協力と支援

本学各図書館・室は以上のように被害を受けたが、概ね1月20日までに期末試験等に支障ないよう応急的な復旧を済ませることができた。

この間、本学は近接の大規模大学として、兵庫県南部地域の被災者や各大学に対する、各種以下のような支援活動を展開していた。

- ①神戸大学附属病院、市立西宮病院、神戸市役所救護センター等の病院に対する医薬品や物資の援助（医病院）
- ②板宿小学校に「大阪大学医学部救護センター」を開設。医師、看護婦、薬剤師を常駐。（医病院）
- ③神戸大学、神戸商船大学事務局に対する物資援助。事務官、技官の派遣（事務局）
- ④医学部附属病院における被災患者の受入、被災地へ医師、看護婦等を派遣（医病院）
- ⑤移動診療バスによる巡回歯科診療（歯病院）
- ⑥応急仮設宿舎の提供（旧医病院看護婦宿舎150室）
- ⑦被災受験者への支援（参考書等の集積、高校等への搬送。学習施設の提供。）
- ⑧被災学生に対する図書館利用の無条件許可。
- ⑨神戸大学学生（院生を含む）に本学開講の講義の聴講を無条件許可。
- ⑩神戸大学入試会場の提供。
- ⑪その他

附属図書館は自身の復旧のあと、以上のような大学としての支援活動の一環を担うこととなった。その内容は上記③、⑦、⑧に関連した次の3点であった。

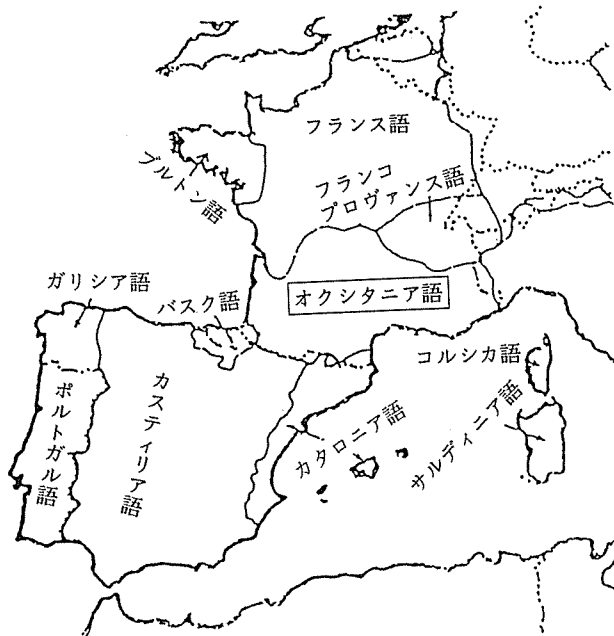
- ①神戸商船大学の復旧作業のため男子職員4名を派遣。（1月31日）
- ②被災受験生のため学習の場を提供した。大阪大学事務局では被災受験生の支援にかかる前線基地として全国から集積されてくる受験参考書、教科書、文房具等を整理し、被災地の高校等へ搬送する活動を担ったが、同時に附属図書館としても本館、両分館合わせて280席を被災受験生の勉強の場として提供した。2月末現在延べ236人が利用した。
- ③被災地大学生（国公私を問わず）に本館、両分館、理学部及び基礎工学部図書室の利用を無条件許可した。（2月末現在延べ1,184人が利用、貸出冊数は1,006冊）
これは神戸大学からの図書館利用及び講義聴講の便宜にかかる依頼に応じた支援措置であるが、図書館利用については神戸大学だけでなく、国公立を問わず被災学生に対して貸し出しを含めて開放したものである。

プロヴァンス

大 高 順 雄

故杉富士雄岡山大学名誉教授のプロヴァンス関係の蔵書の大半が遺族の意志によって本学附属図書館に寄贈された。そこで、プロヴァンス言語、文学の歴史的背景を紹介し、貴重な図書を数多く含む碩学のコレクションへの案内に代えたい。

プロヴァンスは、西をローヌ河、東をヴァール河に囲まれ、アヴィニョン、マルセユ、ニースを主要な都市とする。その西は、ルーシオン、ガスコニュ、リオネに広がり、トゥールーズやモンペリエを都邑とするラングドックがある。古くからこれらの地方は、オクシタニア（オク



ク語圏) と呼ばれ、フランスの南三分の一を占める(地図)。その北にパリを中心とするオイル語圏がある。従って、フランスはオック語圏とオイル語圏に大別される。オクシタニアの言語オクシタンは、北部オクシタン(リモージュ語、オーヴェルニュ語など)、中部オクシタン(ラングドック語とプロヴァンス語)、西部オクシタン(ガスコニュ語)に分かれる。ラングドックの南西には、バルセロナを中心とするカ

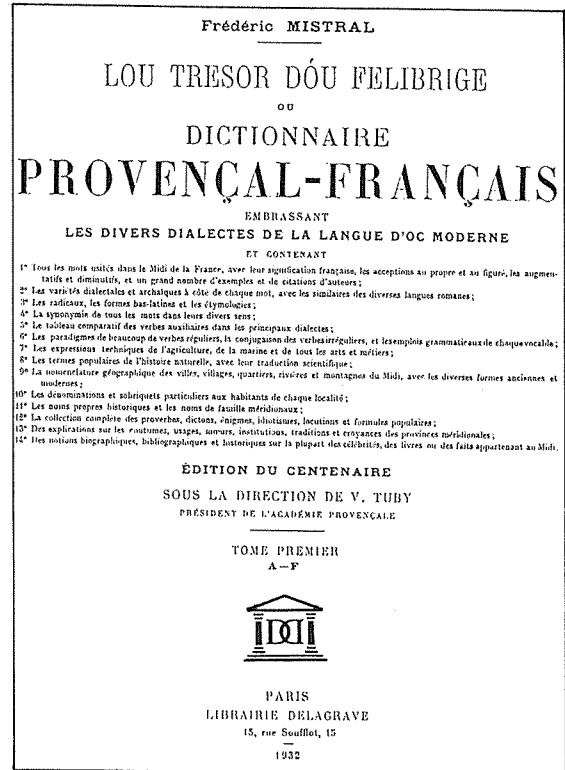
タロニアがある。カタロニア語は、マドリードのカステイリア語とは異なり、オクシタンと兄弟語ないし双生語をなす。古くからプロヴァンスとラングドックは、カタロニアと共に独立心の強い地方である。

プロヴァンスには、前1000年以前にリグーリア人が定住し、前七世紀にギリシャ人が植民地マッシリア(マルセユ)を作った。やがてケルト人に続いてローマ人が侵入し、前125年プロヴィンキア(属州)とした。プロヴァンスの名は、それに由来する。プロヴァンスは後27年にキリスト教を受け入れ、ナルボンヌを首都として栄えた。五世紀に、北にはブルグンド族、南には西ゴート族、東ゴート族、フランク族が相次いで侵入した。プロヴァンスは、フランク族(メロヴェ朝、シャルル朝)の名目的支配の下に封建制を徐々に確立して行き、九世紀から十世紀にかけて襲撃を繰り返した回教徒に対抗するため、1032年に神聖ローマ皇帝を名目上の宗主と仰ぎ、諸伯領として編成された。それらの伯領では、自由都市が発達し、経済成長が見られた。十一世紀末から、十三世紀末まで吟遊詩人(トルバドール)は、特にプラトニックな愛と女性崇拜とに基づく叙情的宮廷文学を産んだ。英国王アンリ二世の妻アリエノールは、強力な擁護者となって北フランスにも、イギリスにも、ヨーロッパ全土にもそれを広めた。一方、独自のロマネスク様式の教会建築も発達した。プロヴァンス諸伯領は、婚姻を通じて1113年から1245年までカタロニア伯領を合併し、言語と文化を共有し、社会を進化させた。十三世紀に敬虔なキリスト教の戦士ラモン・ベランゲ五世は、アルピを中心として南フランスに猛威を振るった異端カトリ派の壊滅に成功し、パリのフランス王家とも隣のアンジュー王家とも婚姻関係を結び、繁栄をもたらした。このア

ンジュ一家は、南イタリアのナポリ王国に目を向け、プロヴァンスの支配に関心を示さなかったため、ジャンヌ女王とルネ王は民衆に愛された。教会大分裂に際しては、1309年アヴィニョンに対立教皇が君臨した。しかし十五世紀になると、プロヴァンス伯となったフランス王ルイ十一世は中央集権を進めた結果、プロヴァンスの独立を弱めた。十六世紀に始まった宗教戦争が旧教徒と新教徒の悲惨な抗争を招き、十七世紀になっても、パリと激しい対立が繰り返された。プロヴァンスの政治的叛逆は、フランス大革命期のジロンド党に代表される。十九世紀中葉にフレデリック・ミストラル(1830-1914)は、ジョゼフ・ルーマニユ(1818-91)やテオドール・オーバネル(1829-86)らと共に、叙情詩劇『ミレイヨ』(1859)を端緒として「プロヴァンス語の復活」(フェリブリージュ)を唱えた。フェリブリージュとは、プロヴァンスの伝説でイエスと論争したとされる「7人のキリスト教のフェリーブル」に由来する。カタロニアでは、ジャシン・イ・サントロー・ベルダゲ(1845-1902)が壮大な叙事詩『アトランティダ』(1877)を嚆矢として「カタロニア語の復活」(リナシェンサ)を叫んだ。共に中央語の支配に対して地方言語を擁護する文化活動である。前者はトゥールーズ大学、モンペリエ大学を中心として発達し続けている。後者はスペイン政府の言語政策「カタロニア語の平常化」の根幹をなす。

寄贈された蔵書の内には貴重な『フェリブリージュ辞典』(1878刊)と『プロヴァンス語辞典』(1894-1924)がある。また、『カタロニア・バレンシア・バレアル語辞典』(1924-83)と『カタロニア古典全集』は必須の資料である。

(おおたか よりお 言語文化部教授)



フェリブリージュ辞典



ミストラルの胸像

ナンテール図書館（パリ第10大学図書館）

Nadia Kober

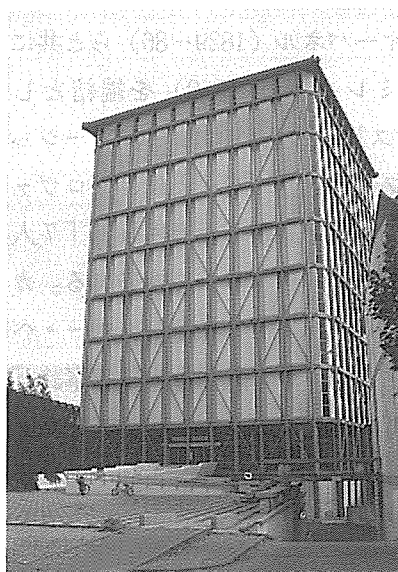
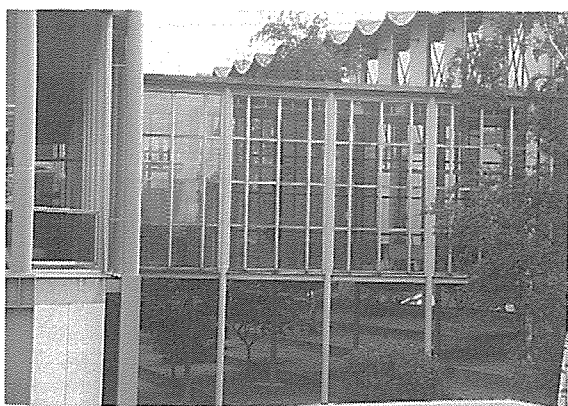
関西新空港と比較すべくもないとはいえ、パリ第10大学の図書館、ナンテール図書館は光に満ちており、灰色のキャンパスの中では小さな灯火である。

学生はガラスの風車に入るように、図書館に入る。回転ドアは軽く開き、どの閲覧室へもチェックされることなく自由に入っていくことができる。レファレンス室、雑誌閲覧室、法学図書室、貸出図書室は1階だ。経済学図書室、文学・言

—主題カタログ 法学、政治学関係の図書には主題目録が作られている。この目録は法学図書室で検索できる。

—その他、Telesystemes-Questel 及び Sinorg-G Cam、Sunist、Ciril の4つの会社が提供するデータベースが利用可能だ。ただし、これは有料。

雑誌閲覧室はレファレンス室の近くにある。



語学図書室、人文科学図書室は2階にある。図書は国際10進分類法 CDU にしたがって分類されている。

レファレンス室は図書館を訪れた者が必ず通らなければならない部屋だ。ここにはカタログがある。

—カード・カタログ 1988年12月までに図書館に受け入れられた本を探すにはカードをくらなければならない。著者目録、書名目録があり、アルファベット順にカードがならんでいる。

—OPAC 1989年以降に図書館に入った図書はコンピューターでさがすことができる。

ここには次のカタログが備えられている。

—マニュアルの目録（所蔵する3000タイトルの雑誌の目録）

—OPAC（受け入れ中の雑誌）

更に、CCN（catalogue collectif national＝全国総合目録）のCD-ROMがあり、簡単に探している雑誌を所蔵している図書館を探すことができる。

貸出図書室 約70,000点の図書とカセットを備えている。

いくつか例外はあるが、学生はこの図書館の

心地よい雰囲気の中を自由に動きまわる。図書館員は優しく、忍耐強い。いつも、学生が資料を探す手助けをしようとしている。とはいえ、学生は自分で探し出す。この点は強調してよいだろう。どんな学生がどの書架の間を気まぐれにうろつきまわっていても、見とがめる人はい

ドをもった資料は書庫にあり、1階入り口正面の連絡席で注文しなければならない。学位論文についても同様。なお、学位論文の総合目録はF棟の128-131室にある。

結論。この図書館の機能はたいへん単純なものだ。閲覧室の白くつややかな机から目を上げ



ない。図書館の中を徘徊した末に、どれほどすばらしい発見があることか。

何事にも例外がある。MあるいはMagのコー

と校庭の木々が見える。この静寂の中で学生は知的な渇きを満たす。

(言語文化部非常勤講師)

||||||| お知らせ |||||

データベース検索装置の導入

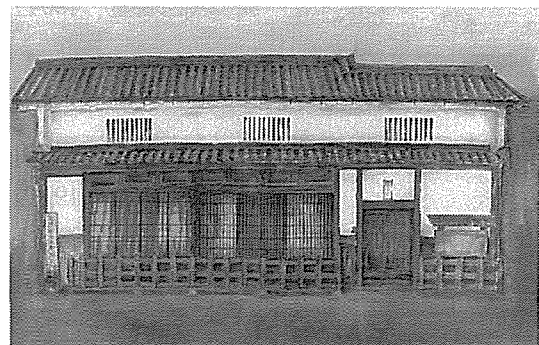
図書館では現在、研究者や学生の方々がODINS経由で学術情報データベースを検索することができるようにするため、データベース検索装置の導入準備を進めています。この装置にデータベースを収納することで、利用者はODINSに接続したパソコン等から直接検索することができるようになります。サービスの開始時期、提供するデータベース、利用方法等については準備が整い次第お知らせします。

基礎工学部図書室の一部利用停止

基礎工学部図書室では、地震災害の書架復旧作業に伴い、1980年から1984年までの和・洋雑誌の利用を一時停止します。

夏休みに書庫の再整理を行い利用できるようにする予定ですので、ご了承下さい。

生命科学分館に絵画の寄贈



生命科学分館の新築を記念し、前分館長鈴木不二男教授から寄贈を受けていた絵画をこのほどエントランスホール正面に飾った。絵は日本南画協会理事の田井久江画伯が鈴木教授の依頼を受けて、大阪大学とゆかりの深い「適塾」を画材とし作成した120号の大作である。このことに関連し2月22日、津本分館長より感謝状が同画伯に贈呈された。

■■■■■ 教官著作寄贈図書 ■■■■■

—本館—

- | | |
|---|--|
| 五百蔵弘典 (基礎工・非常勤講師) | 新物理化学 (上) (化学同人 1994) |
| Stannic oxide gas sensor / K. Ihokura et al. (CRC Press 1994) | 井上文子 (文・助手) |
| 原田平作 (共通・教授) | 泉南市山間部言語調査報告 / 井上文子他 (泉南市教育委員会 1994) |
| 日本の美術 (芸術学フォーラム 5) / 原田平作他編 (勁草社 1994) | 沖田知子 (言文・助教授) |
| 岡部泰昌 (法・教授) | アリスの英語 2 / 稲木昭子、沖田知子 (研究社 1994) |
| 刑事訴訟法 / 岡部泰昌他編 (青林書院 1994) | —生命科学分館— |
| 江川温 (文・助教授) | 青笹克之 (医・教授) |
| 西洋中世の秩序と多元性 / 江川温他著 (法律文化社 1994) | 治療のための病理診断学 / 青笹克之他編 (南山堂 1995) |
| 久貴忠彦 (法・教授) | 志賀健 (医・教授) |
| 新判例コメンタール民法別巻 / 久貴忠彦編 (三省堂 1994) | 環境と健康 / 志賀健他編 (HBJ 出版 1993) |
| 大高順雄 (言文・教授) | 岡田宏 (歯・教授) |
| 松田穰先生古希記念文集 / 大高順雄他編 (駿河台出版社 1994) | アドバンス ペリオドンティクス / T. G. Wilson, Jr. 他著 岡田宏他訳 (クインテッセンス出版 1995) |
| 森本益之 (国公・教授) | —吹田分館— |
| 法学要論 / 森本益之 (嵯峨野書院 1993) | 薦田憲久 (工・教授) |
| 刑事政策講義 / 森本益之 第2版 (有斐閣 1994) | 情報システム工学入門 / 薦田憲久著 (朝倉書店 1994) |
| 松尾武清 (理・教授) | 樹下行三 (工・教授) |
| Biological mass spectrometry / T. Matsuo et al. (Wiley 1994) | コンピュータ工学 / 樹下行三著 (昭晃堂 1993) |
| 坪村宏 (基礎工・名誉教授) | 紙野桂人 (工・教授) |
| | 都市の文化 / 紙野桂人他著 (都市文化社 1994) |

大倉一郎 (工・教授)

鋼橋の疲労／大倉一郎著
(東洋書店 1994)

興地斐男 (工・教授)

Correlation effects in low-dementional
electron systems / ed. by Ayao Okiji et al.
(Springer series in solid-state sciences
118) (Springer-Verlag 1994)

柏原士郎 (工・教授)

建築デザインと構造計画／柏原士郎、橋英三
郎編著 (朝倉書店 1994)

坪村宏 (基礎工・名誉教授)

新物理化学 (上) (化学同人 1994)
新物理化学 (下) (化学同人 1994)

白川功 (工・教授)

回路理論の基礎／白川功他著
(コロナ社 1994)

鳴海邦碩 (工・教授)

都市環境デザイン 13人が語る理論と実践
／鳴海邦碩編 都市デザイン会議関西ブロッ
ク著 (学芸出版社 1995)

藤田正憲 (工・教授)

Wastewater treatment using genetically
engineered microorganisms / ed.
Masanori Fujita et al
(Technomic 1994)

上田幸雄 (溶研・教授)

軽量化構造・材料とその溶接技術／上田幸雄
他著 (溶接学会 1994)

栖原俊明 (工・助教授)

量子電子工学／原俊明著 (オーム社 1994)

権田俊一 (産研・教授)

分子線エピタキシー／権田俊一編著
(培風館 1994)

岡田博美 (工・助教授)

情報スーパーハイウェイ 社会のためのマルチ
メディア通信と広帯域ネットワーク 基本技
術とビジネス展開／D.Wright 著 岡田博美
訳 (日刊工業新聞社 1994)

棋木享 (工・教授)

ウォーターフロント開発と水環境創造／棋木
享著 (技術堂出版 1995)

—理学部図書室—

稲葉章 (理・講師)

アトキンス物理化学要論／P.W.Atkins 著
千原秀和 稲葉章訳 (東京化学同人 1994)

興地斐男 (工・教授)

Correlation effects in low-dementional
electron systems / ed. by Ayao Okiji et
al. (Springer series in solid-state sci-
ences 118)
(Springer-Verlag 1994)

—基礎工学部図書室—

坪村宏 (基礎工・名誉教授)

新物理化学 (上) / 坪村宏著
(化学同人 1994)

新物理化学 (下) / 坪村宏著
(化学同人 1994)

■■■■ 会 議 ■■■■

分館長会議

6. 12. 19 (木) 9:58~11:29 (本館会議室)
1. 次期附属図書館長候補者の選挙手順について審議した。
 2. 附属図書館利用規程の改正について審議した。
 3. 図書館雑誌所在情報サービスの利用に関する内規の改正について審議した。

図書館委員会

6. 12. 21 (金) 10:08~11:25 (本館会議室)
1. 投票により法学部林毅教授を次期附属図書館長候補者として選出し、総長へ推薦することになった。
 2. 附属図書館利用規程の改正について審議し、原案どおり承認された。
 3. 図書館雑誌所在情報サービスの利用に関する内規の改正について審議し、原案どおり承認された。

生命科学分館運営委員会

6. 12. 21 (水) 15:00~16:40
(生命科学分館会議室)
1. 平成7年度生命科学分館資料費分担について、平成7年度の固定率については40%とし、平成8年度については30%とすることで各部署での検討

結果を待ち次回の委員会で協議することとなった。

2. 生命科学運営委員会規定第6条の代理人の権限等について協議の結果、原案どおり承認された。

生命科学分館運営委員会

7. 2. 6 (月) 15:00~15:50
(生命科学分館会議室)
1. 平成7年度生命科学分館資料費分担の固定率について、平成7年度は40%で合意されたが、平成8年度以降については、資料費分担の覚書の見直しを含め、新たにワーキング・グループによる検討を進めることが了承された。
 2. 次期分館長候補者に投票の結果、岡本光弘医学部教授が選出された。

吹田地区運営委員会

7. 2. 24 (金) 15:00~16:10 (吹田分館会議室)
1. 次期吹田分館長候補者に投票の結果、水谷幸夫工学部教授が選出された。
 2. 利用内規等について審議し、承認された。
 3. CD-ROMソフトの購入について審議し、関係部局で分担購入することが承認された。
 4. 不用図書の廃棄について審議し、承認された。

■■■■ 日 誌 ■■■■

- | | | |
|-------------|--------------------------|------------|
| 6. 12. 9 | 近畿地区国公立大学図書館協議会主題別研究会 | (生命科学分館) |
| 12. 14 | 図書館情報システム特別委員会 ILL 専門委員会 | (本館) |
| 12. 19 | 分館長会議 | (本館) |
| 12. 21 | 図書館委員会 | (本館) |
| 12. 21 | 生命科学分館運営委員会 | (生命科学分館) |
| 7. 1. 18~19 | 国立大学附属図書館事務部長会議 | (長崎大学) |
| 2. 3 | 図書館情報システム特別委員会 ILL 専門委員会 | (本館) |
| 2. 6 | 生命科学分館運営委員会 | (生命科学分館) |
| 2. 10 | 学術情報センター課金委員会 | (学術情報センター) |
| 2. 24 | 吹田地区運営委員会 | (吹田分館) |

編集後記 この号が皆様のお手元にある頃には田中一朗館長、松浦正部長は退官しておられるでしょう。最後の1年には2回の災害がありました。お2人の責任者としてのご苦勞に敬意を表します。